萬葉拾穗抄

二之上

萬葉集巻第二

相聞歌

難波高津宮御宇 大鷦鷯天皇 諡曰仁徳天皇也 應神天皇第四子也 母曰仲姫命

皇子 女 太皇大后 五百城入彦

思天皇御作歌四首

磐姫皇后 葛城襲津彦女

君之行 氣長 成奴 山多都祢
待加 将行 待爾可 将待
迎 乎 出立 待尓 待乍 居
君 之 行 氣 長 成 奴 山 多 都 祢
迎 加 将 行 待 爾 可 将 待
吾 黒 髪 尓 霜 乃 置 萬 代 日
如此 計 戀 乍 者 高 山 之
磐 根 四 巻 手 死 奈 麻 死 物 乎
在 管 裳 君 乎 者 将 待 打 靡
吾 黒 髪 爾 霜 乃 置 萬 代 日
一云 居明 而 君 乎 者 将 待 奴 婆
珠 乃 吾 黒 髪 爾 霜 者 雰 騰 文
山一首見古歌集二

秋 田之穂 上乎 乎 霧 相 朝 霞
何時邊 乃 方 二 我 戀 将 息
秋 乃 田 之 穂 乎 苅 核 相 朝 霞
何 時 邊 乃 方 二 我 戀 将 息

萬二上 一

かくばかりこひつゝ　祇曰第二句恋つゝあらすハと云ハ恋つゝあらんよりハする
ふハこひつゝ　仙覚云恋つゝ行ハすといハこひつゝ行よりハといふ心也　いふ説あり
萬葉高山乃磐根しまきてといへるやうに山ハ八雲抄ニ大和とかけり　磐根しまきて
とハ磐根を枕とする心也　廟所ハ岩をもて屍を埋ける也　祇仙二義一様なり
行きてとハ君をハ　我又霞のまゝにまつとも待んとしてうち
なびきてハ祇曰髪ハ長くたるゝなびくをいへるなり　萬葉押なへてなと言ひきや
ぬばたまの黒髪をハ　我ハ幸ふ乃身より内　祇曰ぬれてもうちもいつもいへり
下り昔乃心又ありきとも　萬葉羈旅歌　霧ハ為扇の霞ときは先の月乃
秋乃田のほのうへにきらふ　霧は朝霞とハ霧乃立ぬにこえて
わが恋やまんと訶あり　一切恋の乃ことをもたえハ消るまでハふ
治るもし　是乃字ハ助字也　まつ是なる事乃まれといふハ我恋やまんそ

軽太子姧軽太郎女二

うらなと元年にこす

手長あし即位乃

天皇二十三年　甘時末

イ古事記曰軽太子ハ

ところそえもめの君ゟ

ゆきけなかくの此歌憶良

ゟ歌林かいふ磐姫皇后乃

歌とゆかい古事記小ハ

衣通皇女の歌とする

是を立つるすし　注二為

古事記　三巻あり元明

天皇御宇大朝臣安麻

呂撰

軽大郎女　号軽大娘皇

女又号衣通王允恭

皇女母軽木梨太子同

流於伊予湯一日本紀曰

太子ハ為儲君不得罪

古古事記と同し

軽太子　系図云木梨軽皇子允恭天

皇太子母ハ皇后忍坂大中姫

天皇二十三年姧軽太郎女二故其太

子立為太子

子ヲ流於伊豫湯二也此時不堪恋慕而

追往時歌一首　古事記与類聚歌林所説不同作者亦異

也日本紀曰難波高津宮御宇大鷦鷯天皇二十二年春正月天皇

語皇后納八田皇女将為妃時皇后不聴爰天皇歌以乞於皇后云々

三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀伊国到熊野岬取其處之御綱葉而還於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中時皇后到難波済聞天皇合八田皇女大恨之云云亦曰遠飛鳥宮御宇雄朝

日本紀曰難波高津宮
日本紀十一卷仁徳紀也
こゝにのりそひくしの
山のまよりゆきけるを
再磐姫皇后乃こと
ふしことといふんとそ
くもこゝにいへり
亦曰遠飛鳥 日本紀十三
巻允恭天皇の紀
そもをひくしの軽太子
軽大娘皇女乃もも
ゐ古事記のふみ
すとらんとそし
二代二時 仁徳と允恭
御綱葉或御綱柏
お川日本紀の
嫡稚子宿祢 天皇二十三年春正
月甲午朔庚子木梨軽皇子爲太
子容姿佳麗見者自感同母妹軽
太娘皇女亦艶妙也云云遂竊通
乃悒懐少息二十四年夏六月御
羹汁凝以作氷天皇異之卜其所
由卜者曰有内亂蓋親親相姦平
云云仍移太娘皇女於伊豫者
今案二代二時不見此歌 御綱
葉或御綱柏歟御綱柏伊勢神宮
御前樹也取其柏備神供云云
遠飛鳥宮大和國高市郡倉橋

穴穂天皇 諱允恭 仁徳天皇二子也
衣通王 軽太娘女乃名
古事記曰御名所以負
衣通王者其身之光
自衣通出也云是
衣通姫乃ふみ似て
別心混乱すらす
きみやゆきけらし
そも軽太子乃伊予小舟
流を駈く追波を分
のみおもひこしもの名
ゆんこしもの名
附句也 猶か追て徃
こもふ太ふこうせの
ふ古事記うる
いもつもいぞて

宮南北地是也 雄朝嬬稚子宿祢
允恭天皇諱仁徳天皇二子也
衣通王
君之行氣長久成奴山多豆乃
迎乎将往待介者不往
もつへをゆんよもちよ
迎江大津宮御宇
甥鏡王女御歌一首
天皇御製 天智
妹之家毛継而見麻思乎 一云妹之當継而見武乎
妹山跡有大島嶺介家妹有
猿尾麻之平家居
一云いもやせやも

奉和御歌一首

鏡王女　或曰額田姫王

秋山之樹下隠逝水乃
吾許曽益目御念従者
わきこそまさめ今のいきの

内大臣藤原卿大織冠　諱鏡王女時贈

内大臣歌一首

鏡王女

玉匣　覆乎安易開　而行者
君名者雖有　吾名之惜毛
ますみの鏡王女歌一首

額田姫王

内大臣藤原卿

玉匣　将見物尓　山乃　一云　三諸之
狭名葛　佐不寐者　遂尓
麻之目乎
もろかづら

内大臣藤原卿時作歌一首

吾者毛也　安見児得　皆人乃
得難乎　為云　安見児衣多利
えてしものを

吾者毛也安見児得有皆人乃
得難乎為云安見児衣多利
えてしものを

内大臣藤原卿

奉和御歌一首

鏡王女

秋山之樹下隠逝水乃
吾許曽益目御念従者
わきこそまさめ今のいきの

内大臣藤原卿大織冠　諱鏡王女時贈

内大臣歌一首

鏡王女

玉匣　覆乎安易開　而行者
君名者雖有　吾名之惜毛
ますみの鏡王女歌一首

額田姫王

内大臣藤原卿

玉匣　将見物尓　山乃　一云　三諸之
狭名葛　佐不寐者　遂尓
麻之目乎
もろかづら

内大臣藤原卿時作歌一首

吾者毛也　安見児得　皆人乃
得難乎　為云　安見児衣多利
えてしものを

吾者毛也安見児得有皆人乃
得難乎為云安見児衣多利
えてしものを

娘子石川郎女時贈答歌五首

久米禪師

水薦刈 信濃乃真弓 吾引者
宇奈人備而 不欲常将言 可聞

石川郎女

三薦刈 信濃乃真弓 不引為而
強介備而 行事乎知跡 言莫君二

梓弓 引者隨意 本辺者
後 心乎勝奴 鴨

久米禪師

梓弓 都良絃取波 氣引人者
後 心乎 人曽引

東人之 荷之緒本毛
緩乃 荷之緒本毛

獻梓弓一千二十張 以流太宰府 仙物之川
可美小女云 日本紀一
日十五二君子ウツセトト後山集五松浦乃仙女をよめる歌のことばの
仙物馬人乃族信用寺ふ見安云よき人ふれをさひしめて
こりみこと仙物祇祖さひしめその風に一せ心い我ひきまらせい美人我
をさひしめていおこりふんところ石川郎女ふり二首
みそぎする 吾の上をし 思ほすな 我ひとの妻
こうさまつりしもせす吾ふれ川もせす吾ふんを我ひそれ吾ふこと
万つさふりしもせす石川郎女ふ答心ほの心を
万つさふりしもせす 我ひそも石川郎女ふ答心ほの心を
ますらおにいきに 我をひきまる吾ふと我和ふそいふ
ますらおに我をひきまる吾ふと我和ふそいふ
久米禪師
万つさふりしもせす 我ひそも石川郎女ふ答心ほの心を
吾妻心ほの心を知りこと
一二のふこと實よ知
あつま人乃 のさき矢を 二つ手ニ持ち
万つて引人ふの引心を

もえる人こそひけれ
ゆつま人乃のさまれそこ
仙曰荷前(ノサキ)乃絹とは諸國
乃御調(ミツキ)物を云之荷前
とは荷の乃はじめを云也
をつりといふも同じ
心は彼のさまれ絹のを
あるかしくゆい付ける
やうに吾妹のかゝると
ここへる人一言憂哉云
心にのるは心よかるを云之
兄安按月公愛の説こふ
いへるを作るれ

妹情爾余家留香聞
いもはこころにのりにけるかも

娉(メトル)巨勢郎女(コセノイラツメヲ)時歌一首　大伴(トモノ)宿祢(スクネ)譚安麻呂(ヤスマロ)

玉葛實不成樹爾波千磐破
神曽著常云不成樹別爾
たまかづらみならぬきにはちはやぶる
かみぞつくといふならぬきごとに

報(コタフル)歌一首　巨勢郎女　細流曰大納言巨勢人女

玉葛花耳開而不成有者
誰戀爾有目吾孤悲念乎
たまかづらはなのみさきてならざるは
たがこひならめあがこひおもふを

しめかけてみあがつね　祇園神社考に大木は花のみ咲て子もあらねのうる
所るこれをさすの御同に立させまれは神のつきといふこともある
あるねかへりもあるつけといふ心はあまひとのおかへし　又男あまき女は魑魅(チミ)

小らせしまへきしよめるれ仙曰兄安云夫(シト)おねよは神のすかに我はまだそわり
〔ことし〕吾東は説祇泊按の説と同源氏紹角書細流にも此歌を引きとこの
玉かつら花の子祇園先にうけひきまする事也愚案大伴宿祢の哥にも玉葛
乃子あらねを女にたとへてならぬ木に我ならて神のつくなるは詞の
左ふうへのりん我をうるさ
をえふ故ずとの也

藤原夫人　字氷上大刀自(ヒカミノオホトジ)
天武帝の夫人也

明日香清御原宮御宇天皇(アスカノキヨミハラノミヤニアメノシタシロシメススメラミコト)　天渟名原瀛眞人天皇

賜藤原夫人御歌一首
天皇御製

吾里爾大雪落有大原乃
古爾之郷爾落卷者後
わがさとにおほゆきふれりおほはらの
ふりにしさとにふらまくはのち

わがさとに大雪　仙曰
此夫人を字を大原の大
刀自(トジ)とも云故よりく
よみませり也愚案吾
方にふる雪はもりに
らしとの法よりふれし
わかをれをの子り
童蒙抄云かの子とは

奉和(コタヘ)歌一首　藤原夫人

吾岡之於可美爾言而令落
雪之摧之彼所爾塵家武
わがをかのおかみにいひてふらしめし
ゆきのくだけしそこにちりけむ

曇小雨ふる 仙曰おりふし蛇竜と云豊後風土記に今汲泉水有蛇竜謂於簡美よし常陸風土記曰新沼郡駅家名曰大神所以然称者大蛇多在因名駅家とてとりつゐ雪をふらしめ竜尻乃ふるひ東日本紀一日伊勢諾尊斬軻遇突智為三段其一段是為高竜童蒙抑乃ほとばしる所の心つらぬき乃雷ハ我ゐかり震る露龍乃ひて降せれハ此方乃雷ハいゆるなり

大津皇子 日本紀曰皇子大津天武天皇第三子也懐文筆詩賦興自大津始也

大伯皇女 大津の妾得姪

わりせこを やるとて

大和藤原乃宮の古への剋を志ひて暁起

藤原宮御宇 天皇諡持統天皇

大津皇子竊下 伊勢神宮上来

時御作歌二首

大伯皇女

吾勢祐乎 倭 遵 遣 壹 怙夜深 而

わりせこを やるとてさよふけくやもとさよふけ

鶏鳴 露爾 吾立 所沾之

わりぬれ

二人行 村去 過 難寸 妹山平

ふたりゆけとゆきすきかたき いもやまを

如何 君之 獨 越 武

いかてきみかひとりこゆらむ

贈石川郎女御歌一首

大津皇子

足日木乃 山之 四付二 妹待 跡

あしひきの やまのしつくに いもまつと

吾 立 所沾 山乃四附二

われたちぬれし やまのしつくに

奉和歌一首 石川郎女

吾平待 跡君之沾 計武 足日木能

わをまつと きみのぬれけむ あしひきの

山之四附二 成益物 平 乎

やまのしつくに なるましものを

竊嬬石川郎女時津守通古露

其事時御作歌一首

大津皇子

大船之津守之占尓将告　登波
雖不有　我二人宿之

贈石川女郎御歌一首

大名兒彼方野邊遠尓　刈草乃
束之間毛　吾志目八方

並皇子尊

幸吉野宮時贈額田王歌一首

弓削皇子

古爾戀流鳥鴨　弓絃葉乃
三井能上従　鳴渡遊

奉和歌一首　従倭京進之

額田王

古爾戀良武鳥者　霍公鳥
盖雖来鳴　吾戀流其騰

従吉野折取蘿生松柯遣之時

名児乎　吉野乃山尓　霊木与　立栄流樹　人皆乎
羨　我戀妹者　見依鴨

弓削皇子　紹運録天武皇子

古爾戀流鳥鴨　弓絃葉乃
三井能上従　鳴渡遊

幸吉野宮時贈額田王歌一首

弓削皇子

古爾戀流鳥鴨　弓絃葉乃
三井能上従　鳴渡遊

奉和歌一首　従倭京進之

額田王

古爾戀良武鳥者　霍公鳥
盖雖来鳴　吾戀流其騰

従吉野折取蘿生松柯遣之時

奉歌一首 額田王

三吉野乃玉松之枝者波思吉香聞
君之御言乎持而加欲波久

きみのみことをもちてかよはく

在高市皇子宮天武天皇子朱鳥四年壬申之乱平定後太政大臣七月薨

薨年三時思穂積皇子天武天皇第十二子紀一品知太政官事霊亀元年七月薨

御作歌一首

但馬皇女

秋田之穂向乃所縁異所縁
君尓因奈名事乎痛有登妻

あきのたのほむけのよするところことなるに
きみによりなをことをいたみかもつま

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時

御作歌一首 但馬皇女

遺居而戀管不有者追及武
道之阿廻標結吾勢

おくれゐてこひつつあらずはおはむみち
のあへのしめゆへわがせ

在高市皇子宮時竊接穂積皇子
事既露而御作歌一首

但馬皇女

人事乎繁言痛已世尓
未渡朝川渡

ひとことをしげみいたみこよのあに
いまわたらぬあさかはわたる

御歌一首 舎人皇子

大丈夫片戀将為跡嘆
友

ますらをやかたこひせんとなげけど

118

ありいはふし波ね都川わ
しるハおほき名須へる也
ますらおやかたこひ
鬼 神中於之系 仙点志こ 神中於形云系
こハ読乃さま行くと也
志ゆきしきつる謂也 皆
乃心ハ女ちること序詞ハ
せめますらおの身かくはかなくこひせんと歎けとも猶こひ益すれハ
をかのますらお醜なりとまつひよめり 八雲御抄人倫部にもをふのますらお
しこ 祇曰志このますらおハ醜乃心也 鬼の字をしことよむ也 哥乃心をよ
すらおのうけさまかく読せよ云てねんを我のくやこひんと歎けと
も志こ成ますらおかく推きて読る也 仙於同義 ある此哥陪下ぬる也
なけきつつますらおこ乃こふれ 祇曰是ハ今のますらおの哥の為也
歎つつ恋つつわかゆふかみのぬれするわとよめる也 古来 哥あらます
恋ふられこそとも和ス
ぬれるれいはきしぬれるれ

舎人娘子奉和歌一首

歎管大夫之恋礼許曽吾結髪乃漬而奴礼計礼

なけきつつますらおのこのこふれこそ
わかゆふかみのひちてぬれけれ

思紀皇女御歌四首

119

弓削皇子

芳野河逝瀬之早見須臾毛
不通事無有巨勢濃香問

よし乃かはゆくせ乃はやみしましくも
よとむことなくありこせぬかも

よし乃かはゆくせの
序哥しありこせねとを
よまぬと云心し哥
あるへくもよまへぬりと也
ますよこひもんさめ也

120

吾妹児恋作不有者秋芽之
咲而散去流花尓有猿尾

わきもこにこひつつあらすは秋萩の
さきてちりぬる花にあらましを

わきもこに恋つつ 哥ハ
あき萩せんより死ても
の心し祇曰是ハ哥おの
如く恋つつあらんする二六
哥あきハ花ちるやうに

121

暮去者塩満来奈武住吉乃
浅鹿乃浦尓玉藻刈手名

ゆふされハ塩みちきなん住吉の
あさかのうらに玉もかりてな

ゆふされハ志ほみち
此哥類聚万葉ニハ草部
に玉藻ノ歌し祇曰此哥
恋乃哥とハ見へしと玉
藻をかりよせんと也
塩みちまてしなかりおかん乃まつり過ぬと読る也 古来 刈てなハ刈てんと同

122

大船之泊流登麻里能絶多日二
物念痩奴人能児故尓

おほふねのはつるとまりのたゆたひに
物おもひやせぬ人のこゆへに

おもふねのそつ　こゆるい八代抄に舟乃動きゆくとこやせぬ痩草
し人乃あとに紀貫之が紀曰大船の泊るまりよりれて安くねやう
かねとひをすることく
けらあれてこねい　持（タク）
借（カル）けらくもゆれい
まとる　お家尋心て
我病中逢ねたみ
心のみれもいること
人みおいまるもの
仙曰ものれて　人皆
いとい時人こ皆人こ
ちりけとこ
うて髪乱れこ
ちねん人ふ結ませて
ちりるりみむ
序云八衢八八
ちる　ちちこ
ふわれ　ちこ
ちふねそ
ちこ
これなとわるい
祇曰これなとい
やきぬるの人
多ぬも男こ
ま　ねて
ちくふわれも
こめすちくれ
帳て語る
ちくこ
仙覚も
ちこ
俄ねの

（朱）二ノ上十二

娘子（ヲトメ）　跡（アト）多計（タヘ）　雖言
人皆者今波長　之見師髪乱有等母
人みるも今ハるこ　君
きみりみられも

三方沙彌
橘　之落屐跡乃八衢爾
ちちるりみちのちよ

物乎曽念　妹爾不相而
ものそおもふいもにあはすて
贈大伴宿禰田主歌一首
石川女郎

遊士跡吾者聞流乎屋戸不借
吾平遊利於曽能風流
ことれおとこわさけるやこと
わをへちりとれお

大伴田主字曰仲郎　容姿佳艶風
流秀絶見人聞者靡不歎息也時
有石川郎女自成雙栖之感恒悲
獨守之難意欲寄書未逢良信爰
作方便而似賤嫗已提堝子而到

寢側哽音踴足叩戸諮曰東隣
負女將取火來矣於是仲郎暗
裏非識冒隱之形慮外不堪拘
接之計任念取火就跡歸去也
明後女郎既恥自媒之可媿復
恨心契之弗果因作斯歌以贈
謔戲焉

辣歌一首　大伴宿禰田主遊

令誤吾曽風流士者有かくせるわれうつ

更贈大伴田主仲郎歌一首　問仲郎足疾也

石川女郎

吾聞きてのち須臾好似葬若来乃
足痛仙あるべく吾歎動多扶倍之
わぎもこがいたくなげくらしわれそ
ゆくべくもあらぬ

仙曰古点調不分明まわてかく和一ともかオ
三才罵ののしるこのあ
るべくわらせ。ののしるこ
苦乃角ノ今生まるこの
あるべくこのいたをもてくひくし苦草ハ苦乃苗ありいるべくこと云ふ
乃苦苗ふかつつよう(よめること)ばともめこ(ぶ)ことにばくしみるみる(ぶ)
我まて乃今ふかよく仙そとの号を痛もしせる我ゆのこころ
ばくしきみるべくことよめる毛葉古点にてわれそれにてわのせこふを汗
不分明こいもわせこてしみばともめをつるもも仙説あるべくもにし
ばくてもわせこてしみばともめをつるもも仙説あるべくもにし
ばくてもわせこてしみばともめをつるもも仙説あるべくもにし

贈大伴宿禰宿奈麻呂歌一首

大津皇子宮侍　大伴

大津皇子宮侍石川女郎

古之嫗 亦爲而也如此計

戀尓將沈 如手童兒

戀 平 太爾 忌 金 手武

一云 こひをしなまし

多和良波乃如

ヨワルスガロトニ ミヤタ

與皇子御歌一首

長皇子

冊生乃河瀬者 不渡而由久遊久登

戀痛之 吾矛 ヒイコヒ 通 來祢

こひいもわりせこちかよひこね

皇子乃宮侍女ノトヒト 名未詳

いでへ乃なうるみて

紙曰なうるとハ老女也

いわゆるとハ童女之心古

ノ俗ものをいふなり

みしきこと勢乃やう

に西の池んとよめ

る仙おの同古東石川等

多く古老女とハ載れる

古てや乃やハ助字

なり乃ハ歟をい

冊生ハ八雲に大和とかゝ

せハ吾矛と云皇子を

いふ和名ハ誤

冊生乃を河瀬ニ

小船なども八雲に童蒙

抄小船ハ誤

うらゝ乃みと浦無と云浦

のおきとハいふ

日文次ニ漏うらゝも漏

ちくさもちくとも

滷玉篇音魯鹹水也云

也順和名ニハ潟と訓

よめり文選海賦ニ海漏

廣潤ニ但諸本如此也

潟を滷と仮写の誤

ならん 仙台ノ

えの字下のゝの字脱

せしなるべし

神中納言ハ

從石見國別妻上來時歌二首并

短歌

柿本朝臣人麻呂

石見乃海 角乃浦廻 平 浦無 磯無 登

石見乃うみつのうらをうらなしと

人社見良目 滷無等 一云いそなしと

人社見良目 能咲八師 浦者無 文

縦畫屋師 滷者 一云磯者無鞆綠

海ノ人遣 平 指 而 和多豆乃

荒磯乃上爾 香青生 玉藻

息津藻 朝羽振風社依来

夕羽振浪社来緑 浪之 共

いてもや家尓同
いさまおうり 僧古点は
くらうそと兵を忘
ゆくすいさまうりと
わとくし鯨魚取海
海の海もを辺に
乃海尓いりて鯨あく
き日本紀云通姫の
哥とこしかまも
やもいさまうり海の
なかものをはくを
いさまうりは魚くる波
や鯨をいさとよむ 壹岐風土記云鯨伏在郡西昔者鮪鰐追鯨走来
隠伏故云鯨伏俗云為伊佐布 書紀仁徳天皇妃八田皇女
を磯菜とりさとそと言通とくことなりこれいさま
なるより海の枕詞とくこれは磯菜は辺にもよりくこれいさまうり

彼縁 此依 玉藻成 依宿之妹
かなりく 日波之伎余 思妹之手本 平 よりねて
を 一云 露霜乃 置而之来者 此道 乃 八十隈毎
をきてくれは いみちれやそうへふ
萬段 顔 為 騰弥速爾
よりいとくすれ いやとをよ
里者放 奴 益 高尓 山毛越来奴
さとはさうりねまくすくし山もそさね
夏草之 念 思奈要而 志奴布良武
おいまれなるくまのみん
妹之門将見 靡 此山
もうかとんまひけこれ山

乃海そもいへ 又釋日本紀云通姫哥釋曰謂鯨取也異舎者鯨必雖
者魚也言漁取鯨魚也私案欲謂海之負語也そくらうの反音雅
あまくし 望乃熟田津もいはくしなくの南北海とそもいへ
書そうる 或説云昨宵之風 藻を刈やくく 或説云昨宵之風
なさまおうる足安云約吹わうる風 藻凡多のおやうれいさうる
涼乃なと 仙四日本紀集共乃字をもとも玉藻はと共ふ乃字
玉藻をすりわ妹 藻はともにとりやくくれいよりわけと
いくん枕詞なる藻をすとこ云あすさいこ扱れやうるこの辺
高安乃をまくまくくれは 妹を思ふ玉くまれいこ枕詞
里はさうりぬ 里はをさうる心 まくすうにはすくくうるき心
なりいまくくく 妹もやいまわれて我を思みんこひやる心
なりけけ山 山もひさうりくくりくく妹の門を見んせりとこ山とまひけ
とこうる物さ初とう 一云石見之海津乃浦平無美浦無跡
けの海をもや海をもや海をと
重ねる物さ初とう 個けの浦
をもみんあんとつよて東

人社見良米 潟無 跡人 社見良目
吉咲八師 浦者 雖無 縦恵夜之
人こそうめ人こそうめ
けくえやし海いまくくもよりえやし

滴者雖無　勇魚取　海遠乎指而
かつはるく遠も来にけりうらぐはしと
来田津乃荒　礒之上　爾蚊青生
ふさつらのつらつらつなでおもほゆる
玉藻息都藻明來　者浪　已曽來依
玉藻もなびき藻も明くれは浪之　依
夕去者風　已曽來依
ゆふされは風こそ寄せれ浪のむた
彼依　此依　玉藻成　靡
かよりかくよりなびきたまもの
敷妙之　妹之手本乎　露霜乃
しきたへの妹が手本を露霜の
置而之來者此道之
おきてしけれはこのみちの
萬　阪　顧　雖爲　彌　遠尓
八十隈毎　よろづたび顧みすれどいやとほに
里放　來奴益　高尓
里さかりきぬますます高に
平敷屋師　吾嬬乃兒我　夏草乃
平敷屋師の吾嬬の兒我夏草の
思萎而　將嘆　角
志萎えて嘆くらん角
里　將見　靡　此山
里の見なびけるこの山

反歌

石見乃也高角山之木際從
石見の也高角山の木の際ゆ
我振　袖乎　妹見　都良武香
我が振る袖を妹見つらんか
石見尓有　高角山乃木間
一云石見なる高角山の木の間
從文吾　袂　振乎妹見監　鴨
従文吾が袖振るを妹見つらんか
石見之海　打歌山乃木
石見の海打歌山の木
際從　吾　振　袖乎妹將見　香
の際ゆ我が振る袖を妹見つらんか
小竹之葉者　三山毛清尓
小竹の葉は三山も清に
乱友　吾者妹思
乱れども我は妹思ふ

笹乃葉ハそよとも打そ
れて唯里こそ我ハ仏妹
ぞふと詠りけ宇津の葉こみてるめりど人忍打驚くをとるまで我ハ妹ぞめと
けのさまる類聚神中抄ホの鳥ヒ日本紀十七都奴沙麻渡例能と仮名ヨほまる仙ハ日本紀
十二葛怒羌破赴とあるホ 仙さそホ
仮名のさまふと改む目 角 鄣經 石見ヒ海 乃 言 佐散久
本紀ヒもあれもあれ点 辛 乃 埼 有 伊久里ホ曽 深海松生流
ぜよ更一釋云角障也 乃乃さまるいくりめうふるせる
ぜは角堤ヲ破ホ水ぞのさ 荒 磯 尓曽 玉 藻者生流 玉 藻咸
なり古今ぞ乃松ヲと 生ふるいくりめうふるせる
ヒ注ヒ神中六角と云 ホのこしぬ心ヒ云仙抄ハ角 雞 寐之皃乎 深 海松乃 深目手
多ヒ注ヒ中抄ハ雞鳴の 思 騰 尓 夜者 幾ゝくヒ毛 不有
角ヒある成ヒ注皆ぬ仮 延 都多乃 別 之来者 肝
ことさく 仙日抄のさ 向ゝむ心平 痛 作 礒
らくヒ注のさまるホ

為 騰 大 舟 渡 乃 山 黄
ふすれとちるなれ乃 わもち乃山のもみ
葉 乃 散之 亂 尓 妹 袖 清 尓毛
ちるよれちか乃もみち尓妹ヶ袖さそめ
不見 嬬 隠 有 屋上 乃 二云室上山
乃てもはゆさるる屋うへの 雖惜
山乃 自雲間 渡 相 月乃
山乃雲なりわくふ月乃ありめ
隠 比来者 天 傳
さもろひこれをあもの伝ふいへ
日刺 奴礼 大 夫跡 人念 有 吾毛
日さすぬれ大夫ヒおもふ有吾毛
敷 妙 乃 衣 袖者 通 而 泊 奴
敷妙乃衣袖者ぬれてとまりぬ
ぬれ乃神ハとまりぬれぬ

ゆふ雨乃辛乃渡をそ
むとそ乃をるる唐人乃
袖のゆ知かさまよ
うふる 辛の渡ハ筑
いくり仙日いハ泰波の
くりハ石ヒ山ヒ能名の
俗名をくりこそ
あひきわこ乃名乃
者をそおふくりわ
妹ヒもこそ日日の
おり海松 法身ヒ仮ふる海松
ヒわかめそ法ヒいふ人
祝ヒ心ぞ今ヒ神をわかめそおもひこおもへ
ふれ乃苔ハそひわふるふれ乃別くこそ松浦別のし陸
まもむひ肝乃うこさむる 大海乃 阿乃山の松浦ヒ海ヒ名
ちりのちりひ 袖もぬれホ妹ふるし 為ヒ二毛袖のちりホ乃ちりひ

昔乃国挽角折 枝介之 有者推之葉介盛
従者介母乎 ありと八志るも

表音をもてこゝに出せるにや 孝徳天皇乃時の女帝乃作に藤我乃赤兄と心を同くして云々とあるを思ふに此歌の女帝乃代りなるべく思ふに赤兄乃ごとき人乃ありて有馬皇子乃謀反ありしなり 日本紀廿六ニ参照

古来風体の仮名遣ども此歌の如く区別なきものおほかるべし

見結松哀咽歌二首

長忌寸意吉麻呂

磐代乃岸之松枝将結 人者反而復将見鴨

磐代之野中立有結松 情毛不解古所念

追和歌一首 山上憶良

鳥翔成有我欲比 管見良目杵母 人社不知 良武

磐代乃浜松枝乎引結而 真幸有者亦還見武

右仲歌等雖不挽柩之時所作
唯擬歌意故以載挽歌類焉

大寶元年辛丑幸紀伊國時見
結松歌一首 柿本朝臣人麻呂

後將見跡君之結有磐代乃
子松之宇礼平又將見
香聞

近江大津宮御宇 天智天皇

天皇聖朗不豫時奉御歌一首

大寶元年 文武天皇
改明帝四年十月有
馬皇子死于平野
のちのことと思ふ
ふる里の真幸なくは
と詠て柩を
挽し人なきをは
あはれ哀のそふ
天皇聖躬不豫
日本紀曰七日天智天皇
十年九月天皇寢疾不豫

もとよりこの日のことと云ことをしらず不可詳
かの柩をつかさどりし人かさだかならず
天原にて天乃原の意にや
あるべし欽のそふべき心也

天原振放見者大王乃
御壽者長久天足有
倭大后

天皇聖體不豫御病急時奉獻御
歌一首 倭大后

青旗乃木旗上辛賀欲布跡羽
目尓者雖視直尓不相
香裏

青旗とは葬具小旗の上に
仙杖の曰青旗と
常陸風土記曰葬具
儀赤旗青幡交雜時人謂之幡舞國後世言便
称信太國
風記曰葬具赤旗

序位元日節会乃大礼小雨ふりけるによりて仍天皇不豫のおことわりをもとしきのふつさにはあらねどもとて侍るなり

天皇崩御時御歌一首

倭大伯

人者縦　雖不念　息登母玉　鬘之緒乎　吾忘目八方

日本紀七七天智天皇崩　十年十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮

いとはさるものやむ千鳥

仙曰あふことは行乃縁乃なる縁乃字を出誤れる様集り光熱をこうむりて焼れ出もせぬを焼れ出もするを焼人はこひやするらむ

すゑは仙ふしくれとそ帝を葬奉うつせみ哭沢乃杜乃

天皇崩御時歌一首

婦人　姓名未詳

空　蝉師　神尓　不勝　者　離居而

うつせみし神にしあれはえたへねはこもりくの

朝　嘆　君　放　居而　吾恋　君

泊瀬乃山尓　吾宅有　者　手本　巻　持而　衣　有　者

はつせのやまに我やとりけむ　たもとまき　ころもかたしけれは

脱　時毛　無　吾　恋　君　曽　伎

ぬく時もなみわかこふる君そ昨夜

賊　乃　夜　夢　所見　鶴

あたの夜夢にみえつる

天皇大殯時歌四首

額田王

如是　有　乃　歟　知　勢婆　大　御船

かくならんとかねてしりせはおほふねを

泊　之　登　萬里人　標　結　麻思平

とまりとまりに人しめをゆはましを

八隅　知之　吾期　大　王　乃　大御船

やすみしる我ご王の大御船

舎人吉年

やすみしる我ご王乃大御船

待可將戀 四翼乃辛崎
まちのこひまん 四翼乃辛崎
まちのこひまん

太后

鯨魚取 浜海乃海平奥放而
いさなとり はまのみひらおきさけて
舶 来 邊 附而 榜 来
こきくるふね へにつきてこきくる
舶 奥津加伊 痛 汝弥曽 邊津
ふね おきつかい いたくなれやそ へつ
加伊 痛 莫 波弥曽 若草乃
かい いたくなゆめ はやそ わかくさの
念 鳥立
おもふとりたち

哭ている弱草吾夫何恰詰
なきている わかくさのわつまはやと
神樂浪乃 大山守者 為誰
さゝなみの おおやまもりは たれすとか

ゝてこゝにかくりませる
従山科 天智乃御陵へ
つゝしみ 天智御陵の事ハ
天智紀に見えたり
退散時作歌一首

額田王

八隅知之 和期大王 恐也
やすみしゝ わかおほきみの
御陵 奉仕 山科乃 鏡山尓
みそなはす やましなの かゝみやま
夜者毛 夜之 盡 日之盡
よるはも よのことく ひるはも ひのことく
哭耳平 泣作而 哉百磯城乃
なのみをや なきて ももしきの
大宮人者 去別南
おほみやひとは いなはれなん

明日香清御原宮御宇
十市皇女薨時御作歌三首 紀日七年

戊寅夏四月丁亥朔癸巳
帝皇女率然病發薨於宮中
高市皇子尊
三諸之神須疑已真耳矣自得
見監乍共不寢夜叙多
神山之山邊真蘇木綿短
如此耳故尓長等思伎
山振之立儀足山清水
歌尓雖行宜之白鳴
天皇崩時御歌一首 仙日明香清御原天
皇崩之時
太后

八隅知我大王之蒼去者
其山平振放見乍暮去者
綾哀明來者問良之
神奈備乃山之黄葉乎今日毛鴨
曰賜麻思明日毛鴨曰賜萬音
其山を振放見つつ暮去者
綾に哀明來者問良之
神奈備の山の黄葉を今日もかも
曰賜麻思明日もかも
乾時毛無